文献紹介

高橋春成　編
『日本のシシ垣―イノシシ・シカの被害から田畑を守ってきた文化遺産―』
古今書院　2010年12月　358頁　5,500円＋税

本書のタイトルにある「シシ垣」とは，イノシシなどの野生動物が人間の生活空間に侵入しないように，石や土で里山に築かれた防御装置のことである。日本農村版「万里の長城」といえるシシ垣には「人びとの獣との攻防が生々しく刻まれて」おり，動物と人間との関わりを改めて考えさせる存在である。本書は，編者の高橋春成氏が代表を務める「シシ垣ネットワーク」の関係者によって執筆されたシシ垣に関する初の専門書である。日本各地に分布するシシ垣の存在形態や築造に至った歴史的プロセス，遺構をめぐる調査と活用，現代におけるシシ垣の再生産など幅広い視点が盛り込まれている。

本書は大きく4部からなり，第1部「先人の遺産『シシ垣』」では，シシ垣が築造されるに至った歴史的プロセスや各地の存在形態が示される。第2部「シシ垣の保存と活用」では，シシ垣遺構をめぐる保存と活用の実態を報告する。第3部「シシ垣を調べる」では，地形調査や発掘調査などからシシ垣遺構を発見するプロセスとその成果を紹介する。最後の第4部「現代のシシ垣」では，現代社会でシシ垣がどのように再生産されているのかを検討する。

各章のタイトルと執筆者は次の通りである。

第1章　シシ垣の分布と構造（矢ヶ崎孝雄）
第2章　猪鹿垣遺構を残し伝えるために―香川県小豆島をめぐる猪鹿垣群の踏査と実測の記録（港　誠吾）
第3章　農民の苦闘を語る砦―三重県紀伊長島の猪垣（中野朝生）
第4章　亜熱帯の森に眠る猪垣―沖縄県西表島の猪垣の配置形態と構造（蛯原一平）
第5章　近江に築造されたシシ垣―滋賀県高島市の遺構（白井忠雄・石庭孫義）
第6章　安芸のシシ垣と地域の歴史（佐竹　昭）
第7章　滋賀県比良山地山麓の土石流災害対策を兼ねたシシ垣とその保存（高橋春成）
第8章　岐阜県根尾谷のシシ垣と活断層調査における活用（金田平太郎）
第9章　群馬県の猪土手―チーム“ししどって”の調査から（姉崎智子）
第10章　沖縄島奥集落の猪垣保存活動（宮城邦昌）
第11章　福井県奥越地方のシシ垣遺構探しとエコツアー（北川博正）
第12章　伊吹山の峠に残るシシ垣の保存活動（谷口隆一・高橋順之・高橋春成）
第13章　シシ垣に類似する自然地形（金田平太郎）
第14章　発掘調査からみたシシ垣（越智淳平）
第15章　島根県の広域防護柵とその効果（金森弘樹）
第16章　住民の合意形成によって被害防止柵をつくる―現代版のシシ垣づくりにむけて（寺本憲之）
コラム1　世界遺産「熊野古道」を取り巻くシシ垣（高橋春成）
コラム2　里山イベントにシシ垣を活用（三浦美香）
コラム3　東京都西多摩地方に残る猪堀跡（角田清美）
コラム4　大阪大都市圏に増えている被害防止柵（石井　亘）

以下，この目次に沿って内容を簡単に紹介する。

第1部は第1章から第6章の計6章から構成されている。第1章では，主として近世に築かれたシシ垣の全国的分布を検討し，その形態から「石塁型」の東日本と「土塁型」の西日本とに区分できることを指摘する。また，近世における鉄砲を用いたイノシシとの攻防にも言及している。第2章は，香川県小豆島における「猪鹿（シシ）垣」遺構の実測調査について紹介する。小豆島では1961年頃から詳細なシシ垣の遺構調査が進められており，石積による猪鹿垣の走行距離や走行形，

用材や構築様式などの調査成果が報告されている。第３章では，三重県紀伊長島地方に30kmにもわたって残されている猪垣遺構の調査結果が示される。口碑や古文書から，同地方では田畑の獣害に悩まされてきたこと，シシ垣の築造に際して紀州藩の援助を要請したことなどが明らかにされ，シシ垣を「農民の苦闘を語る砦」として位置づけている。第４章は沖縄県西表島のシシ垣について取り上げ，人々が地形や土地利用を巧みに利用してシシ垣を築いてきたことを指摘する。また，サンゴの用材利用の指摘は興味深い。第５章では，近世に築造されたシシ垣を村落互助の表出として位置づけ，滋賀県高島市を事例に各村々が共同して石や竹，土など様々な材料を用いてシシ垣を築造補修し，明治期まで活用したことを指摘した。第６章は，広島藩領に分布したシシ垣を内陸部と沿岸部とに分類対比することにより，シシ垣の存在を近世における人口増加や耕地開墾など人間活動の活発化の所産として理解している。

続く第２部は第７章から第12章の計６章からなる。第７章は，シシ垣が土石流災害対策に利用するために築かれていたことを滋賀県比良山地山麓から報告する。また，シシ垣の保存活用について地域住民に周知することが有効なことも指摘する。第８章はシシ垣が活断層調査に活用可能という岐阜県根尾谷での事例が報告されている。シシ垣の築造年代と地震発生年代とを比較することにより活断層の活動状況が推定可能とするもので，大変興味深い。第９章は群馬県榛名山麓の20kmにわたる「猪土手」の位置復原や，現代における猪土手の築造体験など環境学習の取り組みが紹介されている。第10章は沖縄本島国頭村における「ウーガチ（大垣）」を取り上げ，用材としてテーブルサンゴが用いられていること，戦時中には避難路として活用されていたこと，現代の林道建設に端を発するウーガチの保存運動などに言及している。第11章では，シシ垣遺構をエコツアーに活用する福井県奥越地方のユニークな取り組みを挙げる。同県勝山市でシシ垣をめぐる周回遊歩道が整備され，シシ垣遺構や周辺の自然観察を織り込んだエコツアーが展開されていることを紹介する。第12章は「白イノシシ」神話が伝わる滋賀県伊吹山に築かれたシシ垣について，地元住民と「シシ垣ネットワーク」との協働による遺構の保存と活用の取り組みを紹介し，それが地域づくりに寄与したり住民のシシ垣に対する保存意識を高めたりしていることを指摘した。

第３部は第13章と第14章とからなる。第13章は，シシ垣と自然地形との類似や区別について論じられ，活断層マップや実測量，空中写真判読，航空レーザー測量などによってシシ垣を同定する手法を紹介する。また，自然地形を利用したシシ垣の存在を先人の知恵を物語るものとして理解している。第14章は，発掘調査によって明らかとなった大分県南部のシシ垣を取り上げ，シシ垣が囲む空間的範囲が集落・浦全体であるタイプと個人の屋敷地・耕作地を囲むタイプとに大別され，築造主体を考慮することにより両タイプがさらに細かなタイプに分類されることを提示する。

最終の第４部は第15章と第16章で構成される。第15章は，中山間地域でのイノシシ被害が深刻な島根県における広域防護柵の効果を検討する。効果のある柵として，電気防護柵，ワイヤーメッシュとトタンの組み合わせ柵，畔波板と電牧線の組み合わせ柵の３種類が挙げられ，それらを効果的なものにするためには維持管理に向けた集落住民の合意形成と行動が不可欠と指摘する。第16章では，防護柵を設置するための住民の合意形成には地域リーダーの存在やコーディネーターとしての自治体の役割が大きいことを指摘し，実際に防護柵を地域ぐるみで設置した成功事例を取り上げ，合意形成に至るための組織づくりなどを検討している。

本書にはコラムが各部の末尾に付されており，読者の興味を惹きつけている。コラム１では世界遺産「熊野古道」周辺にはシシ垣が広く分布し，散策の中で直接目にできることを紹介する。コラム２では，シシ垣の役割を学ぶ里山イベントの滋賀県比良山麓における取り組みを紹介し，コラム３では東京都西多摩地方に残る「猪堀」の発掘作業を紹介する。コラム４では，大阪大都市圏域においても野生動物による農林業被害が多発していることを指摘し，被害防止柵（シシ垣）の設置が進んでいる実態を報告する。さらに，巻末には本書で使用されている術語や地名等の索引が掲載されており，読者のシシ垣理解に向けた便宜を図っている。

編者も述べるように，シシ垣には獣害に対処し

た先人の知恵や生活史が刻まれている。人々の生活は地域性を反映して営まれており，本書は日本農村の様々な地域特性と関連づけてシシ垣を描き出している。その意味で，動物と人間との関わりはもとより日本農村を理解する一つの視点を提供したといえるだろう。ただ，全体を通して，各章におけるデータの提示や充足などの点でばらつきが出ていたり，各章相互の関連性が明らかでなかったりしている点があり，各章を貫くテーマや視点を明確化する必要性を感じた。しかし，本書がシシ垣を広く社会に知らしめ，その保存と活用を推進するための役割を担っているとすれば，評者の指摘はさほど大きな問題にはならないであろう。野生動物と人間生活との摩擦が各地で顕在化している昨今において本書は時宜を得ており，野生動物との適切なつきあい方を学ぶことのできる好著といえよう。

（中條曉仁）